『学び合い』授業における学習者のソーシャルスキルの変容に関する研究

○花村　至（上越教育大学教職大学院）
○木村　薫（上越教育大学教職大学院）
西川　純（上越教育大学教職大学院）
（j285637k@myjuen.jp）

要約

本研究は，『学び合い』授業を行った学級において，児童のソーシャルスキルの変容について明らかにすることを目的とする。小学校２年生を対象に授業を実施し分析を行った。その結果，児童の変容が明らかとなった。

キーワード：『学び合い』，ソーシャルスキル

Ⅰ　問題の所在

文部科学省（2001）では，「児童生徒の問題行動の背景や要因の一つに，社会性や対人関係能力が十分に身に付いていない」ことを指摘している[1)]。

また，文部科学省（2006）は，「LD，ADHD が友達との人間関係がうまくつくれないことも見受けられる。LD の場合は他者の表情や会話に含まれる言外の意味やその場の雰囲気などが分からないために，ADHD の場合は相手の話をさえぎる，友だちに対してかっとなるなどの理由がある。そのため，ソーシャルスキルトレーニングと呼ばれる社会生活上の基本的な技能を身につけるための学習を行う場合もある。」としている[2)]。

ソーシャルスキルとは，佐藤ら（2005）は，「対人関係を円滑に運ぶための知識とそれに裏打ちされた具体的な技術やコツを総称したもの」と述べている[3)]。

河村（2007）は，ソーシャルスキルの重要性について「対人関係の体験学習が不足している現代の子どもたちに対しては，学校教育の中でソーシャルスキルを計画的に教育していくことが必要」と述べている[4)]。このように，児童生徒の問題行動の改善には，学校教育の中で，ソーシャルスキルトレーニングを行い，社会性や対人関係能力を身に付けることが必要であると言える。

繪内ら（2006）は，学校教育でのソーシャルスキルトレーニングの実践を行った。具体的には，「学級全体にソーシャルスキルトレーニングを実施するという CSST を，A 小学校において 200X 年２月～200X+1 年１月まで計５回にわたり実践した。学級全体の社会的スキルの向上と，学級の仲間関係の改善を目的とし，岡田（2001）の「指導のための児童用ソーシャルスキル尺度」を用いて，「集団行動」，「協調行動」，「セルフ・コントロール・スキル」，「仲間関与スキル」，「言語的コミュニケーション・スキル」の５領域で，その効果を判定した。その結果，ある程度長期期間継続することで CSST の効果が得られる。」としている[5)]。課題として，「学期に1～2回のペースでCSSTを行ったが，これでは実施回数が充分とは言えず，社会的スキルを伸ばしていくためには，もっと実施頻度を増やし，継続的な指導を行う必要がある。そのためには，学校現場において学級担任が中心となり，CSST を実施していくことが理想的である。CSST であれば学級全体を対象として実施することができるので，例えば特定の教科や道徳，学級活動に組み込んで実施することが可能である。」としている[6)]。

教科の学習で，ソーシャルスキルトレーニングを行わずに，対人関係を良くしている実践もある。それは，西川が提唱している『学び合い』の考え方を取り入れた授業である。西川（2010）は，『学び合い』の考え方を取り入れた授業について「子ども同士が互いに学び合い，わからないことを互いに聞き合い，自発的に学習する。」授業としている[7)]。西川（2008）では，『学び合い』の考え方を取り入れた授業は，「小学校でも中学校でも高校でも，国語でも社会でも数学でも，有効である[8)]。」としており，西川（2008）では，『学び合い』の考え方を取り入れた授業をすることで，「子ども同士の関わり合いが増加する[9)]。」「成績が上がり，子ども達

の人間関係は良くなる[10]。」「ADHDの子が目立たなくなる。教えている教師も楽になる[11]。」「LDは,『学び合い』によって問題なく学習を継続することが出来る[12]。」としている。

教科の学習で,『学び合い』を取り入れた授業を指導方法とし，ソーシャルスキルの変容について検討された研究はない。

Ⅱ　研究目的

『学び合い』を取り入れた授業を行っていない学級において,『学び合い』を取り入れた授業を実施した際の児童のソーシャルスキルの変容について明らかにすることを本研究の目的とする。

Ⅲ　研究方法

1　調査対象

新潟県A市立B小学校2年生児童数:16名

（男子:9名，女子:7名）

2　調査期間

平成28年11月～12月

3　調査単元

『学び合い』の考えを取り入れた全10時間の授業

4　調査方法

・本研究では調査開始前と調査終了後に,調査対象者である児童全員に対して,藤枝ら（1999）[13]のソーシャルスキル尺度から担任教師と話し合い,児童に回答させるにあたって不適切と考えられる項目を削除し,アンケートにして回答させる。

・西川（2015）が提唱する『学び合い』の考えを取り入れた授業を行い,学習者全員,授業者,担任教師の発話をICレコーダーで記録する。

・ビデオカメラを教室の前方と後方の計2台設置し，学習者,授業者,担任教師の活動の様子を記録する。

・各授業後に児童全員に振り返りシートを記入させる。

5　分析方法

・アンケートから調査開始前と調査終了後の分散分析を行う。

・藤枝ら（1999）[14]の児童用評定項目に該当する発話と担任の気になる発話の分類分けを行い授業回数ごとの発話数の変容を量的質的に分析する。

Ⅳ　結果及び考察

『学び合い』を取り入れた授業を行った学級においてソーシャルスキルに変容があることが明らかとなった。

※詳細については当日発表する。

引用文献

1)文部科学省:「少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議」,2001,http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/003/gijiroku/980301.htm(2016年11月30日閲覧)

2)文部科学省:特別支援教育について,それぞれの障害に配慮した教育,「LD,ADHD の教育」,http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/004/008.htm（2016年11月30日閲覧)

3)佐藤正二,相川充：実践！ソーシャルスキル教育中学校,p8,図書文化社,2005

4)河村茂雄：いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル CSS-小学校中学年,p.18,図書文化社,2007

5)繪内利啓，杉山愛，馬場恵子，丸峯良子，水嶋由紀，高原香織，井上寛子，田中栄美子，馬場広充：小学校小規模学級におけるSSTの実践,香川大学教育実践総合研究，13，pp33-46,2006

6)前掲5)

7)西川純：『学び合い』スタートブック,p.3,学陽書房,2010

8)西川純:気になる子の指導に悩むあなたへ,p.21,東洋館出版社,2008

9)前掲8）p.71

10)前掲8）p.20

11)前掲8）p.114

12)前掲8）p.113

13)藤枝静暁,相川充：学級単位による社会的スキル訓練の試み,東京学芸大学紀要1部門,50,pp.13～22,1999

14)前掲13)